3.教育･講演会等

本プロジェクトにとっては、生物多様性とその保全に関して研究だけでなく教育活動も重要な課題である。そこで、奄美分室の活動の中で説明した教育活動以外に以下の活動を行った。

3-1.平成 28(2016)年度 シンポジウム

「薩南諸島の外来種」平成 29（2017）年 3 月 4 日開催

坂巻祥孝 (鹿児島大学農学部)

昨今、日本の環境保全では、外来種問題が緊急の課題として重点施策に取り上げられている。その中でも特に、離島は分布する生物種が少ないため、生態系として外来種の侵入には脆弱であることが知られている。薩南諸島は、数多くの固有の希少野生動植物が分布する地域だが、同時に多くの外来種が侵入し、固有の生態系が損なわれる脅威にさらされている地域でもある。現在、鹿児島大学の全学プロジェクトとして、薩南諸島地域の生物多様性について重点調査研究がおこなわれているため、それらの中で特に外来動物問題に焦点を当てたシンポジウムと本の出版を 2017 年 3 月に行った。

2017 年 3 月 4 日「薩南諸島の外来生物」シンポジウムを奄美大島の奄美市(AiAi ひろば)にて行った。シンポジウムについては、奄美市および奄美群島広域事務組合の共催および環境省那覇自然環境事務所の後援をいただいて実施した。当日は数組の親子連れを含む約 90 名の参加者が集い、9 名の専門家の話題提供のもと、研究成果の普及と世界自然遺産を目指す奄美群島の外来種問題の現状と今後について活発な議論が展開された。話題は第 1 部「農作物被害とその対策」として、奄美大島に再侵入したミカンコミバエ、サツマイモ害虫のアリモドキゾウムシ、かんきつ害虫のゴマダラカミキリの問題を取り上げた。第 2 部では、「在来生態系にはびこる外来種」として、外来アリ類、外来昆虫(デイゴヒメコバチ、クマゼミなど)、アフリカマイマイなど生活の中に浸透し、見落としがちな外来種に潜む問題を取り上げた。第 3 部では「外来生物問題：島での取り組み」と題して奄美大島の河川の外来爬虫類・魚類問題に対する地道な調査や啓発活動、および奄美マングースバスターズの活動成果および今後の見通しについて報告があった。

話題提供者が多かったため 4 時間という長時間のシンポジウムでも、議論の時間が不十分で個別の問題に対し、今後奄美群島がどうしていくべきかという明確な指針は引き出しきれなかった。しかし、モニタリング調査や抑制策を実施しながら住民への情報提供・意識啓発に力を入れ、「外来生物を、入れない・捨てない・広げない」の 3 原則を徹底することの重要性は会場参加者で共有できたと思われる。この際に行ったアンケートではもっと話を分かりやすくした、子供向けのシンポジウムの企画を提案する声などもあり、主催者としても大変参考になる意見をいただくことができた。

このシンポジウムにあわせて 2017 年 3 月 20 日に「奄美群島の外来生物　－生態・健康・農林水産業への脅威－」(（南方新社）を出版した。この本はシンポジウムの話題提供者 9 名を含む 21 人が共同で執筆し、13 章(245 ページ)からなる。奄美群島を含む薩南諸島全体の外来動物問題の現状について最新のデータなどで報告する一冊とした。

当日の会場の様子

3-2.平成 29(2017)年度 シンポジウム

「奄美の植物と世界自然遺産」 平成 30(2018)年 3 月 3 日開催

鈴木英治（島嶼研）

奄美市名瀬の AiAi ひろばで、奄美群島の植物と UNESCO による登録を目指す世界自然遺産についてのシンポジウムを行い、約 60 名の参加者があった。

まず開会のあいさつで島秀典理事から鹿児島大学が行っている奄美群島での取り組みについて簡単な紹介があった後、世界自然遺産登録に詳しい筑波大の吉田正人教授によって基調講演があった。小笠原などすでに世界自然遺産に認定されている地域を例にしながら、世界自然遺産に登録された場合に生じてくるその後の課題として、世界遺産地域における生物多様性の保全と観光利用との両立、周辺地域における持続可能な発展と環境教育の課題などについて説明があった。

実際に奄美群島で自然保護活動に取り組まれている徳之島虹の会の美延睦美氏と奄美野鳥の会の鳥飼久裕氏に、どのような活動をしているかを紹介してもらい、遺産候補地の保全管理に関する今後の課題についての意見をいただいた。美延氏は、自分たちが普通に暮らしていた島が世界自然遺産候補地になったことで、改めて島の自然の素晴らしさに気づき、この豊かな自然を守り未来へ伝えていく取り組みを行ってきた活動について紹介した。鳥飼氏は、森林は植物だけで成り立っているのではなく、多様な動物との相互作用に中で成り立っていることを、普段観察している例を示しながら植物と動物との生存戦略について紹介した。

森林の生態を研究している米田健鹿児島大学名誉教授は、森林は台風による倒木などでダイナミックに動いており、多様な空間を作っており、奄美地域の高い生物多様性を生み出していることを紹介した。植物系統学の宮本旬子鹿児島大学教授は、現在鹿児島大学が最近 10 年間に進めてきた奄美群島の植物相調査の概要を説明し、この地域の千種以上になる植物の多様性がまだまだ未解明であり、今後の研究が必要であることを説明した。

星野一昭特任教授は前年 10 月の国際自然保護連合（IUCN）による遺産調査地の現地調査に同行した経験を踏まえ、世界自然遺産登録の現状と見通しについて意見を述べた。またノネコ問題など今後取り組むべき課題についての話があった。

最後に総合討論で、参加者からの多くの意見をいただいて、シンポジウムを終了した。

開催の挨拶をする島理事

講演をする筑波大の吉田氏

熱心に聞き入る聴衆

3-3.平成 30(2018)年度 シンポジウム

「奄美群島の海と川の生き物たち～未来に残したい宝物～」

平成 31（2019）年 2 月 16 日開催

久米元（水産学部）

2019 年 2 月 16 日に奄美群島の海と川の生物に焦点を当てたシンポジウム「奄美群島の海と川の生き物たち～未来に残したい宝物～」を開催した。本シンポジウムは奄美市、奄美群島広域事務組合との共催および鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、奄美市教育委員会の後援をいただき、奄美市の AiAi ひろばで行った。鹿児島大学の 6 名の研究者から「奄美大島におけるリュウキュウアユの生活史」、「奄美・加計呂麻で出会う干潟の底生生物」、「奄美大島で見つかる多様なサンゴ群集」、「奄美群島の海藻・海草類」、「奄美群島の魚たち」、「奄美群島のエビ・カニ類」についての話題提供があった。

「奄美大島におけるリュウキュウアユの生活史」では、奄美大島だけに野生個体群が残る絶滅危惧種リュウキュウアユの生態について詳細に紹介された。リュウキュウアユが生息する主要河川の一つである河内川では特に個体数の減少が著しく、資源保護に対する対策が急務であることが確認された。「奄美・加計呂麻で出会う干潟の底生生物」では、干潟の底生生物の生息状況について報告され、多くの種が奄美大島を分布北限としており、奄美群島では九州以北とは異なる底生生物相が見られる事から、保全すべき重要な環境であるとの指摘がされた。「奄美大島で見つかる多様なサンゴ群集」では、見落とされがちな内湾に生息するサンゴの種の多様性、希少性について紹介された。「奄美群島の海藻・海草類」では、世界の海草（海中に生育する種子植物）約６０種のうち奄美群島では１４種が確認でき、きわめて多様性が高いこと、「奄美群島の魚たち」でも同様に、本海域における魚類の種多様性の高さが高いことが報告された。「奄美群島のエビ・カニ類」では奄美群島の汽水域、淡水域に生息するエビについて、地史的成り立ちから固有種や北限種、南限種が多く存在し、各種の生態については十分に理解が進んでいないことが紹介された。

シンポジウムではおよそ 70 名の参加者が集い、研究者を交えて活発な意見交換が行われた。奄美群島の自然の素晴らしさ、豊かさ、貴重さ、希少性について実感していただき、この自然を保全していく必要性、重要性について参加者の間で共有することができた。地元の方々からは、沿岸域の開発に伴う海岸の形状や環境、生物相の変化など、具体的な情報が寄せられ、研究者にとっても貴重な知見を得るよい機会となった。

シンポジウムにあわせ、2019 年 3 月 25 日に「奄美群島の水生生物ー山から海へ　生き物たちの繋がりー」（南方新社）を出版した。シンポジウムの話題提供者 6 名を含む 18 人が共同で執筆し、奄美群島など南西諸島の海や河川に生息する生物について、最新の研究成果とともに紹介している。

3-4.令和 1(2019)年度 シンポジウム

「奄美群島の生物多様性」 令和2(2020)年2月2日開催

奄美群島で生物多様性に関わる教育･研究を 4 年間行ってきた成果をまとめ今後どのように発展させたらよいかを考えるために、鹿児島大学郡元キャンパスでシンポジウムを行い、67 名の出席者があった。今回は奄美大島名瀬にある奄美分室と徳之島伊仙町にある NPO 法人徳之島虹の会の会議室にスカイプで接続し、鹿児島大学の会場やパワーポイントの画面を同時上映し質疑にも参加してもらったが、約 10 名が出席した。

最初に、岩井久 企画･社会連携担当理事が開会のあいさつをしたのち、鈴木英治が 4 年間の成果について教育活動を中心として紹介した。次に各研究分野の成果の紹介に入り、最初は陸上植物班の成果について班長の遠城道雄がその概要を説明した。そして鵜川信が徳之島に設置している 4 ha の継続調査区で得られつつある成果をもとに、主に地形と植物の分布の関係を解析した結果を報告した。陸上動物班は坂巻祥孝が班の成果概要を紹介してから、去年の 7 月まで本プロジェクトの研究員であった鈴木真理子が、アマミノクロウサギの生態ついて報告した。アマミノクロウサギを夜の林道で見ることが奄美大島と徳之島の陸上での観光の主目的の一つになっているが、それがウサギにどのような影響を与えているかを自動撮影カメラや、糞に含まれるストレスホルモンの分析から解析しようとしている。水圏生物班は山本智子が概要を説明したのち、田中正敦と佐藤正典がゴカイなど環形動物の多様性について、まだ奄美群島に生息する種数もはっきりとはわかっていないこと、新種も発見したことなどを報告した。人文班は、渡辺芳郎が今年度に本として出版される成果の概要を発表したのち、近年の発掘の進展から新事実が次々と明らかになってきている南西諸島の先史人類学の進展状況を高宮広土が説明した。そして宋多情が奄美群島におけるエコツーリズムの歴史と現在の状況について、とくに最近活発になってきたホエールウォッチングを中心に紹介した。

次に、次年度以降の研究教育の参考とするために、先進的な研究をされている学外研究者の二氏に特別講演をして頂いた。まず国際教養大学の名取洋司氏が、国際自然保護連合(IUCN)が保護区の選定などに使っている KBA（Key Biodiversity Area）のシステムについて紹介し、奄美群島は KBA の点でも高く評価されることを報告した。最後の講演は琉球大学の久保田康裕氏で、同氏は東アジアの膨大な生物地理・分子系統・機能特性情報を統合し、コンピューター上で解析しているが、その成果を紹介し、それらの解析結果から明らかになってきた薩南諸島の生物地理学的な特徴と保全上の重要性ついて報告した。

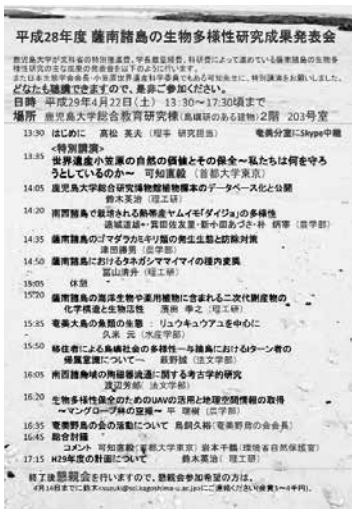
最後に、河合渓が次の概算要求の申請状況など今後の計画について説明した。そして総合討議に入り、個別の講演に対する質疑を行い、将来どのように進めるべきかを議論した。散会後は 20 数名が懇親会に参加し、親睦を深めるとともに、今後の計画を語り合った。

3-5.年間報告会など

前述のように毎年基本的にあるテーマについて奄美大島でシンポジウムを行ったが、鹿児島大学郡元キャンパスでは、平成 29 年度と 30 年度には前年度の研究成果を中心として報告会を行ってきた。

また平成 29 年度には、国際島嶼教育研究センターが後援して第 27 回日本熱帯生態学会大会を奄美大島で開催し、「奄美・沖縄のヒトの自然と歴史」という公開講演会も開いた。分室の活動の章で述べたように、奄美市で開催された第 70 回日本寄生虫南日本支部大会・第 67 回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会、第 13 回日本刺胞有櫛動物研究談話会も後援した。

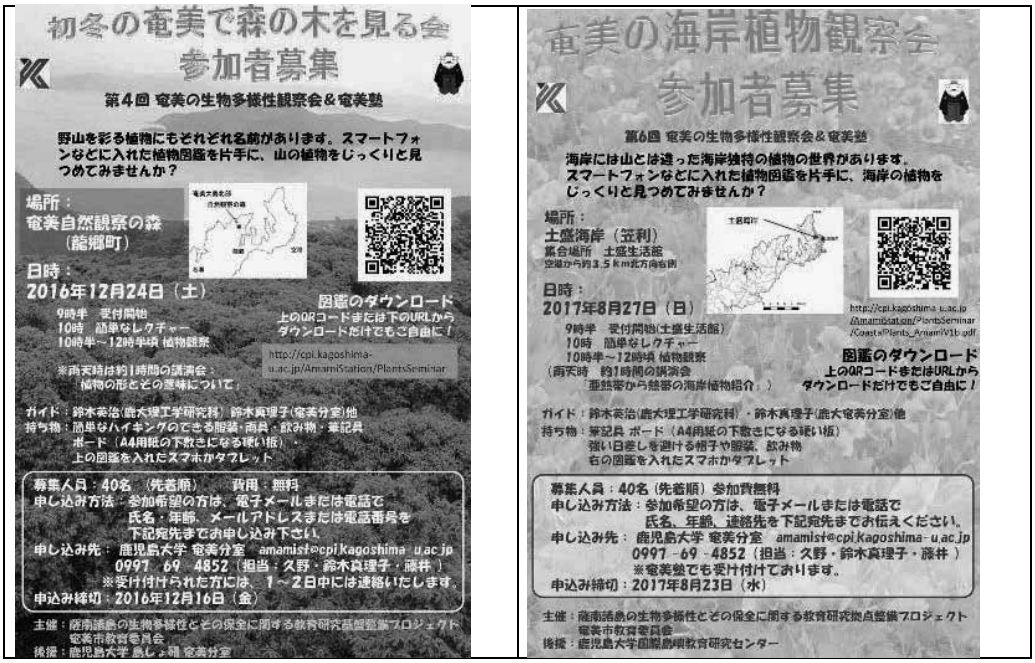
令和元年には奄美分室が平成 30 年度の年度末に移転したので、鹿児島大学で研究成果報告会を行う代わりに、奄美で奄美分室の移転記念講演会を行った。



3-6.陸上植物の観察会

鈴木英治（島嶼研）

陸上は、奄美群島国立公園、世界自然遺産候補地あるいはそれ以外の土地も、ほとんどの土地は植物で覆われている。植物はそれ自体の多様性保全も重要だが、動物の住場所、人間の生活環境を提供しているので、自然環境の理解には植物の理解が欠かせない。しかし、植物について知ることは初心者には難しいことが多い。そこで、地域住民への貢献として自然観察会などを通して植物への理解を深めてもらうことをめざした。2015 年度の「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点形成」プロジェクトでも同じ目的で、観察会を 2 回行ったが、それに引き続き 2016 年 12 月と 2017 年 7 月に山と砂浜の植物の観察会を行った。



植物の名前を知ろうとすると植物図鑑が必要となるが、かなり高価であり特別に興味を持った人でないと購入をためらうだろう。そこでそれぞれの観察会用に図鑑を作りインターネットでダウンロードしてスマートフォンに入れたり、印刷したりして、閲覧できるようにした。現在も次のページからダウンロードできる。

http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/index.html

各回 30 名ほどの参加者があり、好評であった。ただ 1 日の観察会で提供できるものは限られる。初心者向けとしてはそれでよいだろうが、さらに上のレベルの教育に接したいという人の要望には応えられない。世界自然遺産登録を機にエコツーリズムのガイドを職業として考えている人たちや、日ごろから植物に関心を持ってある程度勉強していた人たちには物足りないだろう。

3-7.奄美群島の植物教室

日帰りの観察会では満足できない、ガイド業などの仕事に役立てたいという要望にも応えるために、2018 年からは「**奄美群島の植物教室**」を行うことにした。これは室内講義と組み合わせた観察会を年間に 6 日間行うもので、原則として全日程参加できる中学生以上を対象として参加者を募集した。また名称を「野外観察会」ではなに「植物教室」としたが、植物を学ぶためには野外で実際の植物に触れることは非常に効果的だが、それだけでは不十分な点が出てくる。たとえば、ある種がある形を持つ理由を考えるためには、祖先種や近縁種と比較することが効果的だが、野外で都合よくそれらが隣に生えていることは滅多にない。室内講義でそれらを組み合わせた写真を提示することにより理解が深まる。野外観察と室内での講義を組み合わせた教室を開くことにした。また植物を見るだけではすぐ忘れてしまうので、本来は植物採集をして標本を作ることが最善だが、採集許可の取得、標本作成の労力、保管場所の確保を考えると一般の方が行うには困難が付きまとう。次善の策として、最近ではデジタルカメラやスマートフォンのカメラの性能が高まっているので、デジタル写真を撮影することでことで標本採集の代役させることにした。撮った写真の名前を調べ整理して、できれば自分の植物図鑑を作ることで、理解は一層深まる。基本的に午前中に野外で植物観察を行い、午後は室内で撮った写真の植物の同定、さらにパソコンを使ってエクセルなどのソフトで写真のデータ整理、そしてその日に植物に関連した講義を行う実習とした。受講生には、デジタルカメラと自分用のノートパソコンを持参してもらった。対象地域が島嶼であり、別の島で行う教室に参加することは難しいので、島ごとに行うこととして、2018 年に奄美大島、2019 年には徳之島で実施した。

平成 30 年（2018 年）は、地元の教育機関との連携を深める意味でも奄美市立奄美博物館に後援していただき実施した。鹿児島大学からは鈴木英治と奄美分室の鈴木真理子が担当者として参加し、奄美博物館からは平城達哉氏が参加した。2018 年には 32 名の参加者があった。野外観察で十分に説明するためには大人数では難しいので、十数名の人数で行う予定にしていたが、参加希望理由を書いてもらった申込書を見ると熱心な希望者が多かったので、全員を受け入れて､3 日目以降は 2 班に分けて同じ内容の実習と講義を 2 回ずつ行ったので、延べ日数は 10 日になった。参加者にはエコツーリズムのガイドをやっている人など、前年まで行っていた 1 日だけの観察会には参加されなかった人が多く見られた。32 名の参加者で 6 日全部参加者 12 名、5 日参加 9 名、4 日参加 6 名、3 日参加 3 名、2 日参加 2 名であった。中学生以上を対象としたが、参加者の年齢は 40 歳から 78 歳であった。

実施日と実施場所（野外観察、室内講義）

- 5 月 19 日　　奄美市立奄美博物館
- 5 月 20 日　　大浜海浜公園の海岸と奄美市立奄美博物館
- 6 月 23 日、24 日　龍郷町奄美自然観察の森　園内の森の館
- 9 月 15 日、16 日　宇検村湯湾岳　湯湾　元気の出る館
- 11 月 10 日、11 日　瀬戸内町油井岳周辺　瀬戸内町きゅら島交流館
- 1 月 19 日、20 日　住用林道周辺　マングローブパーク

令和元年（2019 年）にはNOP 法人徳之島虹の会に後援してもらいながら、徳之島で行った。鹿児島大学からは鈴木英治と鈴木真理子が担当者として参加し、10 月は新しくプロジェクト研究員となった宋多情も担当した。24 名が参加し、6 日全部参加した人が 10 名、5 日参加 2 名、4 日参加 5 名、3 日参加 1 名、2 日参加 6 名であった。参加者の年齢は 26 歳から 72 歳であった。徳之島在住者が基本だが、前年に奄美の教室に参加した 3 名が、徳之島でも受講したいとのことで参加してくれた。徳之島虹の会はエコツーリズムのガイドも業務の一つとしており、ツアーガイドを行う人が多く参加してくれた。日程は以下の通りであった。

実施日と実施場所（野外観察、室内講義）

・5 月　11 日　義名山公園と伊仙町中央公民館
・5 月　12 日　喜念浜と伊仙町中央公民館
・8 月　 3 日　天城町防災センターと犬之門蓋
・8 月　4 日　井之川岳三京林道と徳之島町東区公民館
・10 月 26 日　手々海岸と手々へき地福祉会館
・10 月 27 日 天城岳クビリ林道と山公民館

形は似ているが遠縁、近縁だが全く違う形をしている植物も多く、1 日の観察会では驚きだけで理解するところまでいかないことが多い。延 6 日の教室で同じ植物にも何回か観察する機会がると、だんだんとわかって来るように思われる。2 年間植物教室を行ってみて、参加者は当然ながら非常に勉強になったと思ってくれた人が多く、植物を理解する上での効果はあったと考える。ただ、撮った写真を整理してパソコンを使って図鑑を作るなどの作業も取り入れてみたが、パソコンを使い慣れた人が少なく、植物の勉強だけでも時間が足りないほどであったので、パソコンに習熟して図鑑などを作るところまではほとんどの人が到達できなかった。その点は少々残念であったが、6 日間の日程でパソコンまで使いこなすレベルまでもっていくことには無理があったようだ。

龍郷町の自然観察の森で

室内での撮影した植物の写真の同定と整理

徳之島の三京で

3-8.海岸での野外観察会

山本智子（水産学部）・藤井琢磨（島嶼研）・佐藤正典（理学部）

水圏グループでは、2016 年度から 2 年間、奄美大島各地で市民を対象にした観察会を開催してきた。干潮時の干潟やサンゴ礁、岸壁など、徒歩で行ける安全な海岸を選び、そこにくらす生物たちに触れてその生態を学ぶと共に、海岸での安全な楽しみ方も理解して貰おうという催しである。

2016 年にはサンゴ礁を対象として、「サンゴ礁の生き物を観て触って感じよう！」と題した観察会を、9 月 17 日に大浜海浜公園で開催した。干潟の観察会で得たノウハウを生かして、サンゴ礁でよく見られる生物の解説シート「サンゴ礁の生き物観察」を作成するとともに、安全対策のためのスタッフを多めに配置した。奄美市との共催とし、奄美市が定期的に行っている「奄美塾」の一貫としても位置付けられ、参加者 43 名（うち半数が小学生以下）中 35 名が「奄美塾」の受講生であった。運営についても奄美市に協力を得、安全管理は奄美市のスタッフで担当して頂いた。

当日は安全配慮や生き物の探し方、地形などに関して簡単な説明を行った後、参加者自ら生き物探しをおこなってもらった。大人子供が浜で入り混じって一心不乱に探し回り、雨交じりで好天とは言えない天気であったが、多種多様な生き物が見つかった。一時捕獲された生き物については種ごとに異なる形態と生態の関係などの解説も行った。参加者には、生き物探しをより楽しむための新たな視点が得られた等の意見を頂くなど、サンゴ礁の潮間帯に生息する生き物の多様性を感じてもらえたものと思われる。

2017 年には、「新月の夜に泳ぎ出すゴカイを探してみよう」と題して、8 月 22 日に、奄美大島南部の瀬戸内町の手安海岸で夜間の観察会を開催した。当観察会との連動企画であった「大島海峡のいきものしんはっけん写真展」の開催と共に瀬戸内町立図書館・郷土館との共催で実施され、親子連れなど約 30 名が参加した。日没直前の夕暮れの明るさが残る午後 7 時に民宿（シーガルてあん）に集合し、環形動物の多毛類（ゴカイ類）とはどんな生き物なのか、なぜ夜に水中に泳ぎ出るのか、などについて簡単に説明した。日没後、空が暗くなった午後 7 時半頃に海岸に移動し、桟橋に渡る橋の上から水中集魚灯を海面直下まで垂下し、そこに集まってきたゴカイの遊泳個体を長い柄付きのタモ網ですくい取った。この日は新月の大潮に当り、日没後 1 時間が満潮時刻だった。期待された大規模な生殖群泳は観察されなかったが、約 1 時間の間に多様な種（3 科 5 種）の約 10 個体（体長：1–5 cm）のゴカイ類が採集された。標本は民宿に持ち帰り、デジタル顕微鏡で観察した。顕微鏡で拡大した画像をスクリーンに投影し、ゴカイの体が生殖遊泳のために変化している様子を参加者の皆さんに見ていただいた。

また、当日は、陸で暮らすベンケイガニが子ども（ゾエア幼生）を海に放つためにたくさん水辺に集まってくる様子も観察できた。雌ガニを捕獲し、海水の入ったバケツに入れると、カニはお腹を震わせながら幼生を水中に放出した。それを見ていた参加者からは歓声が沸き起こった。地元の人であっても夜間にゴカイやカニを観察する機会は滅多にないと思われ、参加者からは「初めて見た」という声が多く寄せられた。後日、この観察会の結果報告を盛り込んだガイドブック「夜の海辺の生きもの観察―ゴカイとカニの生殖行動」を作成した。

なお、本観察会は当初は 8 月 6 日に予定されていたが、台風 5 号接近（奄美地方に 50 年に一度の大雨をもたらした）のため、延期された。

「サンゴ礁の生き物を観て触って感じよう！」パンフレット（８頁）の表紙

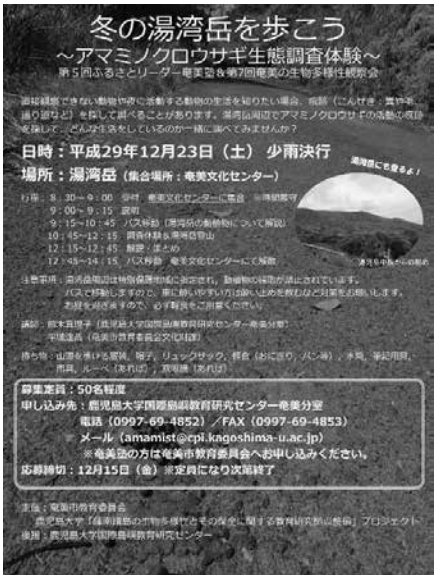
「夜の海辺の生きもの観察」パンフレット（１２頁）の表紙

3-9.陸上動物の野外観察会

鈴木真理子
（環境省奄美野生生物保護センター）

アマミノクロウサギなど希少種を含む陸上動物は夜行性の種が多く、一般には観察が難しいが、糞や食痕を調べることにより昼間でもその存在を知る事ができる。

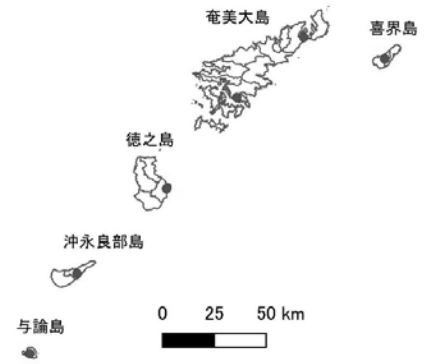
そのような動物の生態調査を地域住民に体験してもらう観察会を平成 29 年 12 月 23 日に湯湾岳で行った。41 名が参加し、アマミノクロウサギの痕跡や湯湾岳付近の希少な植物を観察した。



3-10.島めぐり講演会

鈴木英治（島嶼研）

すでに述べたように本プロジェクトの成果を地域に還元するために、講演会等は奄美大島の名瀬を中心として毎年行ってきた。実際のところ名瀬では、世界自然遺産登録を目指している事情もあり、かなり頻繁に生物多様性関係の講演会や行事が行われている。一方奄美大島でも名瀬以外の地域や、奄美大島以外の特に世界自然遺産候補地ではない島では、講演会等が開かれる機会が少ない。地域全体の発展を考える時に名瀬だけに集中することは問題があるので、2019 年には「島めぐり講演会」と称して、以下のように奄美群島の 5 つの島の 6 か所で講演会を行った。基本的に２名の講演者がそれぞれ１時間程度の講演を行った。講演のテーマについては、奄美群島広域事務組合の職員の方にアンケート方式で意見を聞き、なるべくそのテーマに沿った内容を話せる教員に講演を依頼した。 6回で合計 179 名、 1回で平均 30 名の聴講者があった。初めての試みであったが聴講者には大変好評で、来年も続けてほしいという意見が多かった。



徳之島での講演会会場

第１回 徳之島（徳之島町役場 第４会議室）2019 年４月 13 日（土）聴講者 25 名

「生物多様性の測り方・楽しみ方」 *鈴木英治（国際島嶼教育研究センター）*

地球の温暖化は摂氏何度上がったと表されます。では生物多様性の変化はどんな指標で表されるでしょうか？多様性の指標を作ることは、「多様性とは何か」を考えることから始まります。また、私たち自身が身近にある生物の多様性をどうやって捉え、楽しむかを考えてみます。

「ドローンを利用して島嶼の豊かな自然環境を測る～スマート農業への利用～」

平　瑞樹（農学部）

日本におけるドローン元年から 2 年が経過しました。法整備も進められ，操縦資格等の取得講習会が開催されています。比較的操作が簡単なため，ヘリコプター等と肩を並べる空中農薬散布の手段として期待されています。ドローンを利用してどのようなことができるのか？島嶼の基幹産業である農業への利

用の他，有効な利用方法についても皆さんと一緒に考えてみましょう！

第２回 沖永良部島（和泊町防災センター）2019 年４月 27 日（土） 聴講者 15 名

「奄美群島のサンゴ礁生物多様性」 *藤井琢磨（国際島嶼教育研究センター奄美分室）*

奄美群島は、世界的にも多様な生き物の営みが見られる温暖な海域"サンゴ礁域"の北限近くに位置し、島ごとに様々な海中景観が見られます。本講義では"サンゴ礁域における生物多様性とは何なのか"を解説すると共に、"青く美しい海"という安易な表現では収まりきらない、奄美群島で見られる海洋生物の奥深さを紹介します。

「ドローンを利用して島嶼の豊かな自然環境を測る～スマート農業への利用～」

平 瑞樹（農学部） （内容は第１回徳之島と同じ）

第３回 喜界島（喜界町役場 トレーニング室）2019 年５月 11 日（土） 聴講者 51 名

「世界のなかの奄美の植物」 *宮本旬子（理工学研究科）*

奄美群島には固有で希少な植物が「たくさん」あり、世界自然遺産推薦の理由のひとつになりました。でも、「たくさん」てどのくらい？ なぜ「たくさん」あるの？ 喜界島には「たくさん」ないの？ などなど、いろいろな疑問が浮かびます。また、昔から島にある在来植物と、近年になって入ってきた栽培植物や外来雑草なども「たくさん」あります。地球規模での島々の植物の有り様を地元の皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

「喜界島の地形・地質・災害」 *井村隆介（共通教育センター）*

喜界島は、琉球弧で最も早い隆起速度を持つ島です。喜界島の地形の特徴とその生い立ちについて、奄美の他の島々と比較しながら考えるとともに、隆起の原因とされる大きな地震やそれに伴う津波災害についても考えてみたいと思います。

第４回 奄美大島 龍郷町（生涯学習センターりゅうがく館）2019 年５月 25 日（土）

聴講者 27 名

「絶滅危惧種・リュウキュウアユの生態について」 *久米 元（水産学部）*

リュウキュウアユの野生個体群は奄美大島のみに生息しており、現在では環境省により絶滅危惧ＩＡ類に指定され、地元の方々に大切に保護されています。リュウキュウアユが奄美大島の河川と海でどのように生活しているのか紹介します。

「奄美群島の果樹遺伝資源とその利用」 *山本雅史（農学部）*

奄美群島では固有の在来果樹遺伝資源と海外から導入された品種が生育・栽培されています。これらの多くは亜熱帯性気候に適しており、温帯である日本の他の地域ではあまり見ることのないものです。これらの果樹について紹介するとともに、その保存やそれらを利用した島の活性化についても考えたいと思います。

第５回 与論島（中央公民館 大ホール）2019 年 10 月 19 日（土）聴講者 31 名

「江戸時代の南西諸島における陶磁器流通」 *渡辺芳郎（法文学部）*

江戸時代の南西諸島では、本土からは肥前地方（佐賀・長崎県）の陶磁器や鹿児島の薩摩焼が、南からは沖縄を経由した中国の陶磁器（清朝磁器）が、さらに沖縄で作られた陶器（壺屋焼）が流通していました。島の人々がどのような陶磁器を生活に使っていたか、その具体的な姿を、遺跡の発掘調査を通じて得られた考古学資料などから明らかにします。

「奄美・沖縄諸島の先史時代：奇跡の島々？」 *高宮広土（国際島嶼教育研究センター奄美分室）*

地球儀でみると奄美・沖縄諸島の島々は点でしかありません。このちっぽけな島々には約３万年前からヒト（*Homo sapiens*）がいて、貝塚時代という狩猟採集漁撈民の時代を経て、グスク時代に農耕が始まり、首長社会が成立し、最終的に沖縄島で国が成立しました。と、いとも簡単に奄美・沖縄諸島の先史時代が語られることが多々ありますが、これらを世界史的にみると世界的に大変稀な文化現象であったことがわかります。本講義では、これらの点について紹介します。

第６回 奄美大島 瀬戸内町（瀬戸内町立図書館・郷土館）2019 年 11 月 16 日（土）

聴講者 30 名

「アマミノクロウサギを知ろう！～野生動物と私たちの暮らし～」

鈴木真理子（国際島嶼教育研究センター奄美分室）

奄美群島に生息する哺乳類は、すべて固有種や固有亜種と呼ばれる「ここにしかいない」生物です。これまで調べられた研究や観察を参考に、アマミノクロウサギの生態をご紹介します。また、アマミノクロウサギを例に野生動物と私たちの間にどのような問題があるのかをご紹介し、その解決策についてともに考える場にできればと思います。

「世界遺産からヘリテージ・ツーリズムへ観光・経済」 *萩野 誠（法文学部）*

奄美大島は世界自然遺産によるエコツーリズムで沸騰しているようにみえます。観光業はリスクがともなうものですが、ヘリテージ・ツーリズムには、リスクを軽減する方策が多々あります。この手法を講義することで、瀬戸内町が奄美群島の観光拠点となることを示したいと思います。